
第一三二話

大江山城落事

『前太平記』上 卷第二十 四〇九頁から四一二頁より

[大江山賊徒敗走す]

こうして大江山では、今月の二十四日の早朝から取り囲んで、昼夜競い合っていたが、全く勝敗が決まらないところに、同月二十八日に頼光朝臣の送った京都への急使が、童子退治の顛末を報告して通ったところ、攻め寄せてくる軍勢が喜び合ったことはこの上なく、城中ではこれを聞いて、「もしこのことが本当であるならば

「若し此事実説たらば

どうでしょうか。きっと敵の計略であるだろうか」と真偽はまだはっきりしていない

如何はせん。

一定敵の謀にや有らんずらん

と実否未だ分明ならざる処に、

ところに、同じように三十日の昼ごろから、寄せる軍勢が童子の首を矛の切っ先に突き通し、軍の先頭の前に立って鬨の声を寄せ掛け、担いで連れて攻めてきてしまった。あんなに強く勇ましい城中の軍勢は、昨日までは、そうであっても間違いで

さりとて僻事にてぞ

あろうと思慰め合っていたが、この首を見てすぐに気力をなくし気がめいり、城

有らんと思ひ慰み居たりしに、

此首を見て忽ち精力を落とし氣を屈し

の後ろの山並みにひそかに逃れ落ちていく。城の大將は、これまでと違って、生き残った賊徒の四十人余りを前後左右に立たせ、城門をさっと開いて、まっさかさまに集めて落とし、火を放って戦った。はやり立ち勝気になった寄せる軍勢は、どうして少しでもためらわないのだろうか、入れ替わり立ち替わり持ちこたえた。やがて四十人余りの賊徒は、ある者は殺され、ある者は深手を負って、生き残る者の十人余りは、さらに寄せる軍勢戦の陣中にいて、激しく切って回ったが、殺されたとも思えず、逃げたとも思えず、結局その行方を見失って、死生は分からなくなってしまった。

【羅生門の妖鬼退治（異説）】

通説で言われることには、大江山の首領は酒顛の腹心の眷属である、茨木という者である。巧みに幻術を操り、怪しい力をもつ変化の妖鬼である。大江山が落城した後、都の東寺の羅生門(老)に住んで、往来を邪魔し人々を傷つける。都の中では、これのせいで悩まされる。怖くないと言う者はいない。ところが頼光朝臣が兵を引

然るに頼光朝臣開陣の後、

き上げた後、二ヶ月にわたりこの噂が世間に広がって、それでいて真偽ははっきり

月を越えて此説岐に満ちて、

而も実否分明ならず。

していない。あるものは本当だとして、あるものは嘘とする。ある時頼光朝臣のご
序舎で多くの臣下と宴をする。昔や今、都や田舎の雑談は数時間に至る。その時
に、「羅生門に妖鬼がいて人を傷つける」と言う者がいる。その場にいる人全員不
思議だという。一人、渡部は決して信じない。鬼がいると言う者は顔色を変え、
「それでは私が主人のそばで嘘を申し上げるとお思いになるか。このことは世間に

「さては某君の傍らに於いて、偽りを申すと思ひ給ふか。

此事

広く知れ渡っていて、昨日も五人、今日も三人消されたからには、です。事実を疑

世に隠れ無く、

昨日も五人、

今日も三人失はれつる上は候。

わしくお思いになるのならば、今夜にでもあそこへ外出なさって、疑いを晴らして

誠不審に思し食さば、

今夜にても有れ、彼へ御出あつて

疑ひを晴れ給へ」

ください」。「それでは貴方は確かに、綱はあそこへ参上できない者とお思いにな

「さては一定、

綱は彼へ参り得まじき者と思し食すか。

るか。そのことであるならば、今夜、そこに行って本当か嘘かを明らかにしよう」

其儀ならば、

今夜

彼に行き向かつて、

真か偽りかを糺すべし」

と言って、ついには少しばかりの口論になった。その場の仲間は興ざめして、とも

頗る口論に及びけり。

かくも二人を押さえた。綱がもう一度申し上げたことは、「もともとから野心を持って

「素より野心を存ずるには

いるわけではございませんが、もしこのことが本当であるならば、確かに宮城のそ

非ず候へども、

若し此事実説たらば、

正しく王城の傍らを

ばを鬼の住まいとすることは、後生までもの武家の不名誉。綱が参り向かつて、真

鬼畜の栖とせん事、

末代までも武家の瑕瑾。

綱、罷り向かつて

偽を明らかにし、もし化け物の姿が現れたならば、すぐさま退治させよう。もしあ

実否を糺し、

変化の姿現れなば、

速やかに退治せしむべし。

るいは、嘘であるならば、渡部の向かった印を残し帰ってこよう。早くお暇を」と

若し又

虚説たらば、

渡部が向かひたる印を残し帰るべし。

早御暇」

求めた。頼光がおっしゃったことは、「なるほどそのとおり、このような奇妙な曲

「実にも

斯かる奇異の癖者

者が都にいるのを、そのままにしておくならば、人々の心配が多くなるどころか、

洛中に在るを、

其儘にて閣かば、

人の煩ひ多きのみか、

同時に武家の威光が軽いことと同じように見えている。どういう風でも渡部が参り

且は武威の軽きに似たり。

何様にも渡部罷り向かつて、

向かつてその真偽を明らかにせよ」と言って、すぐに申し上げる命に従って、印の

其虚実を糺すべし」

札をお与えになった。綱は席を立つときに、「どうした皆さん。申し上げるには及ばないといっても、この印を立てないならば、再び皆さんに顔を合わすことはないだろう」と暇を求めて出てしまった。

こうして渡部は緋緘の鎧(式)に同じ毛色の五枚兜(参)の緒をしめ、鬼丸という太刀をお預かり申し上げ、三尺二寸の打刀を十字に横にさし、五尺三寸あった栗毛の馬、口引きの下郎を連れず、たった一騎ですごすごとく二条大宮に馬を南に向け立たせて歩かせた。早くも夜が更け、時が過ぎる鐘の音、雨もひっきりなしに、あちこちの東や西も分からないくらいの夜に、東寺の前を早くも過ぎて、九条大路にちよっと出て、羅生門を見渡すところ、趣なく雷が鳴って、急に吹いてくる風の音に、馬も怖がり身震いし、声高く鳴いて進むことが出来ない。綱は馬を下りて、例の札を取り出し、壇上に立て置いて、疑わしいものが見ているだろうかと四方を睨んで立っていたが、全く目に入らない。渡部はさてと思い、帰ろうとするところに、羅生門の天井から熊のように毛の生えている長い手を伸ばして、綱の着ている兜のしころを掴んで、後ろへさっと引き止める。渡部は少しも動揺せず、鬼丸を抜いて払って切ろうとする。鬼神はやはり放さないで、手に提げて持ち上げようと引き合ったので、兜の緒がぷつつり切れ、壇から下に飛び降りた。綱は振り返って後ろを見ると、その背丈は高門の軒と同じくらいの鬼神が姿を現して、左手には引きちぎった兜を持ち、右手には鉄杖を持ち、月や太陽のような目をむき、綱を睨んで立っていた。渡部は太刀を振り上げ逃がすまいと切ってかかる。鬼神は荒ぶる様相

で鉄杖を振り上げ、えいやと打ちつけるのをさっと受け止め、ひらりとかわし、少しの間戦った。鬼神はますます忿怒し、兜も鉄杖も投げ捨てて、手を広げて取っ組み合おうとするのを、綱は組まれまいと太刀を振り回して、薙ぎ払っていたところで、鬼は腕を切り落とされ、少し弱って見えたのを、渡部は、しめたよかったと激

得たりや賢しと、

しく切ってかかったところに、敵うまいと思ったのだろうか、軒の瓦に手をかけて

手痛く切つて懸かりし程に、

上ると思えたが、姿はすぐに消えてしまった。綱はそれでもやはり戦って殺そうと付いてゆくが、黒い雲に覆い遮られて、その行方を見失った。綱は力及ばず切り落とした鬼の手を取り、馬を引き寄せ乗ろうとしたが、再び引き返し、壇上に投げ捨てていた兜を取り、しずしずと帰った。

こうして頼光の午前に参上して、ありのままに申し上げたところ、頼光は奇妙なことにお思いになり、安倍晴明をお招きして占わせられたところ、「綱は七日の物忌みをして、祈祷には仁王経を読まれるのがよい」と申し上げたのでそのままに行われた。ところが、例の鬼が綱の養母に化けてあれこれと画策して、とうとう自分の手を取り返し、破風の下を蹴破って飛んでいったと言われている。

【筆者の注記】

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

右のこの一章はまだその証拠がはっきりしていない。これを信じるのに十分でないといっても、その定説は広く世間の噂であって、絶やすことは出来なくて、ここに記す。愚かな考えだが、渡部が過ぎ去った貞元の春に、一条堀川で、橋姫の片腕を切り取った。^(肆)ここでは正暦の夏に、羅生門を通り過ぎて、鬼神の片腕を切り取った。ひょっとしたら、再び鬼の片腕を切り取って、再び鬼神が養母に化けて渡部を騙したのか。渡部がこの上なく孝行であるといっても、どうして再びこれを信じるのだろうか。昔切り取ったのがこの鬼であるならば、つまりこの日の切り取ったのは誤りであろうか。この日に切り取ったのがこの鬼であるならば、昔に切り取ったのは誤りであるか。どちらかを真実であるとし、どちらかを誤りであるとするのだろうか。かりそめにこの二つの出来事を記す。後の知と徳を備えた人が誤りを正すのを、ひたすら待つだけ。

<原文>

右此一章未詳其出証。雖不足信之、其説ヘン（ギョウ人偏+扁）在人口、不得已而于茲録焉。愚按、渡部去貞元之春、於一条堀川、断獲橋姫之一臂。今正暦之夏、過羅生門、断獲鬼神之一臂。蓋再断獲鬼神之一臂、再鬼神化養母而欺於渡部哉。渡部雖至孝、何再信之。昔日之断獲是、則今日之断獲非也。今日之断獲是、則昔日之断獲非也。孰乎為是、孰乎為非。姑記此二事。惟俟後之君子是正耳。

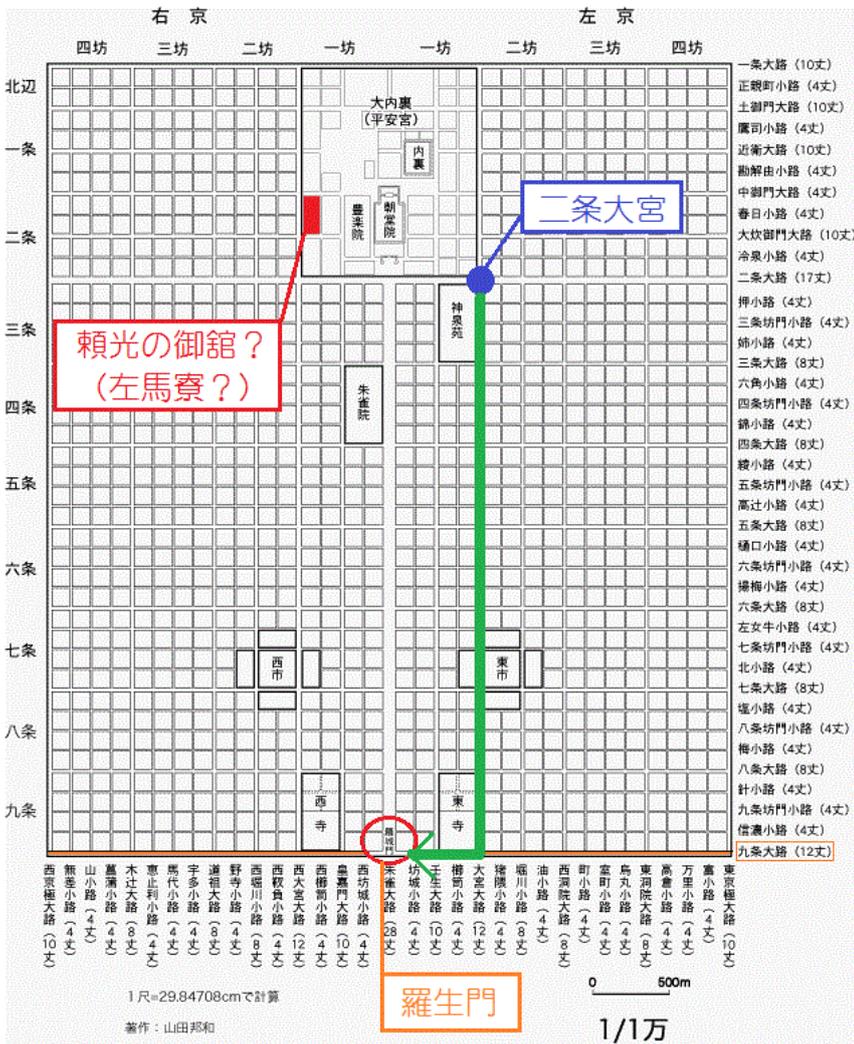
<書き下し文>

右此一章未だ其の出証を詳かにせず。之を信ずるに足らずと雖も、其の説アマネく人口に在り、已むことを得ずして茲に録す。愚按ずるに、渡部去んぬる貞元の春、一条堀川に於いて、橋姫の一臂を断ち獲たり。今正暦の夏、羅生門を過ぎて、鬼神の一臂を断ち獲たり。蓋し再び鬼の一臂を断ち獲たり、再び鬼神養母に化して渡部を欺きしや。渡部至孝なりと雖も、何ぞ再び之を信ぜん。昔日の断ち獲たるが是ならば、則ち今日の断ち獲たるは非ならんや。今日の断ち獲たるが是ならば、則ち昔日の断ち獲たるは非ならんや。孰れをか是なりと為し、孰れをか非なりと為ん。姑く此の二事を記す。惟後の君子の是正を俟つのみ。

注釈

- ※壹・東寺の羅生門……東寺は京都市南区の教王護国寺。教王護国寺は羅生門の東にあった。
- ※貳・緋緘の鎧……鎧の緘の一つ。緋色に染めた革・綾・糸組の緒でおどしたもの。
- ※参・五枚兜……五段下がりのしころ（兜の鉢の左右から後方に垂れて頸を覆うもの）のある兜。
- ※肆・「過ぎ去った貞元の春に、一条堀川で、橋姫の片腕を切り取った。」……詳しくは第 106 話参照。

< 綱動向メモ >



※こちらの図は「平安京探偵団 (<http://homepage-nifty.com/heiankyo/>)」様より拝借し、加工いたしました。

やはり、この話で注目されるのは[筆者の注記]でしょう。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

藤元はこの羅生門の鬼の腕切りと、一条戻橋の橋姫の腕切りをどちらが真実であるかと頭を抱えている。つまり「渡部綱」という英傑が「鬼の腕を切った」という「伝承」を、ただの「伝承」とは考えていない。その「真実の出来事」で、綱が切った腕が茨木童子か橋姫かどちらが正しいのかと考えている。

物語が成立した当初、「綱の腕切り」の伝承が巷でどのように受け取られていたかが気になる所ですね。

どっちの伝承も正しかったとして、橋姫にも茨木童子にも騙された綱は孝行息子すぎますね(笑)

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2018/3/9

改訂：2021/3
海熊童子